



ケブルを探して

12月4日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月4日のおはなし「ケブルを探して」

後悔してる？

わたしが尋ねる。

全然。

あなたが答える。

少しは後悔しなさいよ。

私が諫めるとあなたは微笑んで小さく呟く。

わかった、少しは後悔するよ。

それからあなたはわたしの家に住み着いて、普通の人間として暮らし始める。カボチャの形をした目覚まし時計の音で目を覚まし、一緒に朝ごはんを食べ、バスルームで並んで歯をみがき、仕事に出ていく私を玄関で見送ってくれる。ゴミの日には一緒に下までついてきてゴミを出してくれる。早く目覚めたときはベッドで愛し合うこともあるし、バスルームで愛し合うこともある。

わたしが仕事から戻ると料理をつくって待っていてくれる。どこで覚えたの、料理なんて？と聞くと笑って一冊の料理本を示す。わたしが遙か昔に買って、一度も開かずに本棚に立てかけてそれっきりにして忘れていた本だ。食べてみるとけっこうおいしい。へえ、こんな料理が載っていたんだ、この本。もっといろんな料理が載っているよ。

だから休日には彼が教えてくれてわたしも一緒に料理を作るようになる。午前中から近くのスーパーに買い出しに行って、お昼前にはワインのコルクを抜いて、昼のためには手間をかけずにスパゲティをつくり、午後いっぱいかけて料理を作る。待ち時間のたびに抱き合ってキスをする。一度、勢いでそのまま服を脱ぎ捨てて愛し合いフライパンを焦げ付かせてしまったからは、キスくらいで我慢することになる。

会社にいるときわたしは時折現実感を失う。伝票を整理したり、電話をかけたり、アシスタントの子に指示を出したりしながら、これが現実だとしたら、あれは何なんだろうと不安になる。本当なんだろうか。家にいるあなたは現実の存在なんだろうか。こんな風に幸せでこんな風に胸一杯でこんな風に欲しくて欲しくてたまらない人がいるなんて、そんなことが現実にあるんだろうか。でも家に帰るとあなたは手料理で迎えてくれて、一緒にお風呂に入ったり、ベッドに倒れ込んだりする。

お酒を飲みながら映画を見ていて天使が出てくる。わたしははっとする。あなたがどんな顔をするか、そっと様子をつかがう。でもあなたは別にどうということもなくその天使を見て、おかしなセリフに声を上げて笑う。それからわたしを見て言う。あれが天使だって。全然違うよね。でもわたしには何がどう違うのかわからない。違うの？ ああ違う。どのへんが？ だってケブルがないじゃないか。ケブル？ そうケブル。なにそれ？ ケブルかい？ あなたは困ったような顔をする。ケブルはケブルだよ。

突然わたしは置き去りにされたような気がする。ケブルのことも知らないでわたしは天使と付き合っていたんだ。どうしたの？ あなたが聞く。わたし、ケブルが何かわからない。ああそうか。見えないものだから仕方ないね。見えないものなの？ ああ、ただ感じるしかない。あなたにはケブルがあるの？ するとあなたはにやりと笑って、大好きなくせに、という。え、何、何のこと？ あなたはにやにやするばかり。

それからわたしはあなたを見つめてケブルを感じようとするようになる。そして、ケブル以外にもわたしの知らないことがあるんじゃないかと、目をこらして見つめるようになる。アッオー。あなたが言う。まずいよそれ。見つめすぎないで。強い視線に弱いんだ。ぼくが消えてしまうよ。それでもわたしはあなたを見つめることがやめられない。どうしてもやめられない。

目で見るとはならない。感じるんだよ。少し焦った調子であなたが言う。わかっているの。わかっているのに見るのをやめられないの。そうしてあなたはだんだん薄くなり始める。料理を作るあなたの向こうにコンロの炎が透けて見える。消えないで。どうすることもできない。君が見るのをやめてくれなきゃ。どうしたらいいの？ ぼくを見つめすぎないで。

ある日あなたはすっかり消えてしまう。わたしはあなたの痕跡を探して部屋の中をさまよう。

(「後悔」 ordered by shirok-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ケブルを探して

<http://p.booklog.jp/book/39939>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39939>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39939>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.